

## 重度障害者の日中活動の実態に関する研究Ⅱ

### ——療養介護事業所へのアンケート調査を手がかりに——

杉原 彩 乃<sup>\*1</sup>・加瀬 進<sup>\*2</sup>

特別ニーズ教育分野

(2016年9月13日受理)

#### 1. 問題の所在と目的

青年・成人期を迎える重度障害者は、変形拘縮の進行、運動機能や摂食・嚥下・消化機能の低下、呼吸障害、発作の悪化などの二次障害が起こりやすくなることが知られている(北住 2010, 森 2005)。こうした身体上的の変化に伴い、経管栄養に伴う胃瘻造設、気管切開等の外科的治療を行うなど、介護や治療の方法を再検討する「思春期シフト(小谷 2001)」が求められ、当事者は、経管栄養への移行による食事制限や気管切開による発声の困難さなど、様々な「生きづらさ」に直面する。更に18歳を迎える年には、12年間の学校教育が終了し、学校教育として保障されていた様々な活動の機会が制約される。青年・成人期に、新たに「生きがい」となる日中活動の場を保障し、豊かな生活づくりを進めていくことは、当事者、そしてその家族が願う喫緊の課題である。

一方で、杉原・加瀬(2014)は、重度障害者の日中活動の意義や成果に関して、一定の事例報告等の蓄積があるものの、国や学術的な分野において、全国の事業所で取り組まれている日中活動の実態を網羅的に把握できる調査はこれまでにないことを指摘している。こうした現状を踏まえ、また、現在行われている日中活動の意義を再検討し、その価値を積極的に意味づけていくためにも、全国事業所の取り組みの実態や課題を明らかにしていく作業が必要である。そこで本研究では、全国の療養介護事業所に悉皆調査を行い、日中活動の実態及び日中活動の実施に伴う課題を明らかにすることを目的とする。

#### 2. 研究の方法

調査は郵送郵便調査により行った。アンケートの対象は、療養介護事業所がおかれている全国209の医療福祉施設とし、日中活動の企画・運営を行っている主担当者を回答者として依頼した。調査時期は、平成27年9月から12月であった。本調査票における日中活動は、「療養介護事業所に入所する利用者の社会参加や余暇の充実を促すため、支援計画に意図的に設定された活動を示し、本人の状況をみて、職員が個別に声をかけるなどその場での臨機応変な対応は含まない」と示した。調査の内容は、①日中活動の支援体制と利用者の実態、②日中活動の内容とねらい、③日中活動に関する事業所の希望と課題である。②の日中活動の内容とねらいについては、杉原(2016)の分類をもとに調査項目を作成した。回答は、全国89の事業所から得た(回収率41.3%, うち同一病院2件: 同一敷地内に事業所が2つ以上あり、部署が異なる場合は2通に分けて回答するよう依頼した)。

#### 3. 結果

##### 3. 1 支援体制と利用者の実態

##### 3. 1. 1 日中活動にかかわる支援体制

アンケートの回答者は、児童指導員42.5%、保育士10.3%、生活支援員11.5%、サービス管理責任者8%、看護師5.7%、ソーシャルワーカー3.4%と続き、児童指導員や保育士といった療育スタッフが日中活動の企画・運営を中心的に担っていた。療養介護は18歳以

\*1 長野県伊那養護学校(399-4577 長野県伊那市西箕輪8274)

\*2 東京学芸大学 特別支援科学講座 特別ニーズ教育分野(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

上を対象としており、保育士や児童指導員といった職種の配置を義務付けていない。しかし、病院内に併設する障害児入所支援（88.6%の割合で併設）が、保育士や児童指導員といった療育の専門職を配置しているため、同職員が療養介護の日中活動主担当を兼務しているケースが多いといえる。職員配置基準については、表1を参照されたい。その他、病院内には、短期入所82.9%、生活介護52.3%、放課後等デイサービス

39.8%、児童発達支援39.8%、相談支援37.5%、医療型児童発達支援21.5%、日中一時支援7%といったサービスが併設されていた（図1）。障害者自立支援法以前の施設体系をみると、重症心身障害児（者）施設79.6%、肢体不自由児施設が5.7%、指定医療機関筋ジス・神経病床が6.8%、新規開所が4.5%、併置2.3%、その他1.1%であり、8割近くが重症心身障害児（者）施設からの移行であった（図2）。

表1 職員配置基準

医療型障害児入所支援	療養介護
児童福祉法 平成24年2月3日省令	障害者総合支援法 平成18年9月29省令
医療法に定める職員（医師、看護職員） 児童指導員 保育士 心理指導担当職員 理学療法士又は作業療法士 児童発達支援管理責任者	医師 看護職員 生活支援員 サービス管理責任者

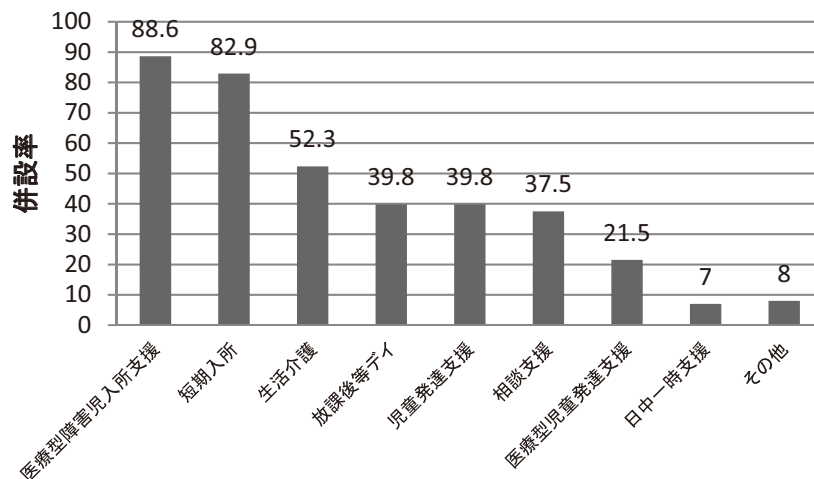


図1 併設障害福祉サービス（N=88）

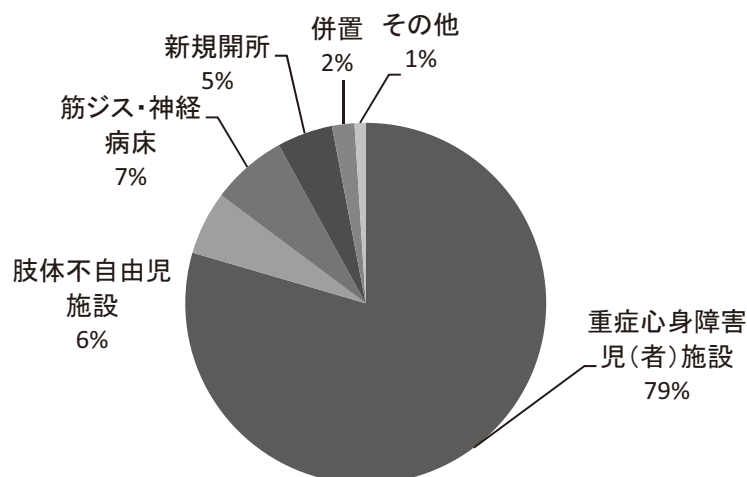


図2 障害者自立支援法以前の施設体系（N=88）

回答事業所の定員は、最大220床、最小5床、平均98.4床であった。療養介護を設置できる最低定員は、20人であるため、この数を下回る事業所は、医療型障害児入所施設の経過措置事業として成人を受け入れているとの回答がなされていた。経過措置とは、医療型障害児入所支援を利用していただ障害児が18歳になっても移行先が見つからず、一時的に入所を継続するための措置である。本調査において経過措置対象事業所は2件であった。

職員配置率は、サービス管理責任者が100%、医師が100%、看護師が100%、生活支援員が98%、理学療法士が92%、作業療法士が90%、言語聴覚士が81%、管理栄養士が94%、薬剤師が86%、医療相談員が56%の割合であった。療養介護における職員の基準には、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士といった機能訓練の専門職は必置ではないが、多くの事業所でこうした専門職がかかわっていることが明らかになった。また看護師を生活支援員としてカウントしている、との回答もあった。

日中活動の企画・運営にかかわる療育指導室を設置、あるいは日中活動専任を指名している事業所は69%であった。療育指導室とは、重症心身障害及び筋神経難病の受け入れを担ってきた国立病院機構において、利用者の健全育成と福祉の増進等を図る福祉専門職として、病棟整備と合わせて各施設に配置されてきた経緯がある（澁谷 2007）。療育指導室がある37事業所の職員数の療育指導室内の平均は、職種別に療育指導室長が0.7人、児童指導員が3.3人、保育士が6.2人であった。療育指導室がなく専任職員のみを配置している事業所（N=24）では、活動専任として児童指導員、保育士、介護職、ワーカー、看護師、音楽療法士などが指定されていた。各職種が置かれている割合をみると（N=24）、児童指導員29.1%、保育士

41.7%、介護職66.7%、ワーカー16.7%、看護師20.8%、音楽療法士4.1%であり、療育専任スタッフの他には、生活支援員等の介護職が、日中活動の企画・運営に携わっていることが分かる。

### 3. 1. 2 利用者の実態

利用者の障害の状況は、重症心身障害児者が8割以上61%、筋・神経難病が8割以上9%、動く重心（動く重症心身障害児者を表す、以下同様）8割以上5%、その他は混合25%であった（図3）。最も多く選択されていた重症心身障害児者が8割以上の内訳には、10割が重症心身障害である事業所が10件、重症心身障害8割以上と筋神経難病が3件、重症心身障害と動く重心が8件であった。この結果から、療養介護の利用者には重度の知的障害と肢体不自由が重複した重症心身障害が占める割合が最も高く、加えて重症心身障害と筋・神経難病、動く重心など、障害の状態の異なる利用者に対して同一事業所内で日中活動を企画している実情が明らかになった。

また、利用者の年齢は、18～30歳が14%、31～40歳が25%、41～50歳が43%、50歳以上が20%であり、全体として高齢化が進んでいた。

### 3. 2 活動内容とねらいの特徴

#### 3. 2. 1 日中活動の内容

療養介護で実施されている日中活動の内容は、表2の通りである。

日常的活動では、散歩91%と9割を越える事業所で取り組まれていた。ついで外気浴も83%と高い割合を示していた。朝の会は、52%、お昼の集いは16%の実施率であった。

鑑賞活動の分類では、音楽鑑賞76%、朗読絵本鑑賞73%、芸能鑑賞73%、映画鑑賞56%であった。朗読絵

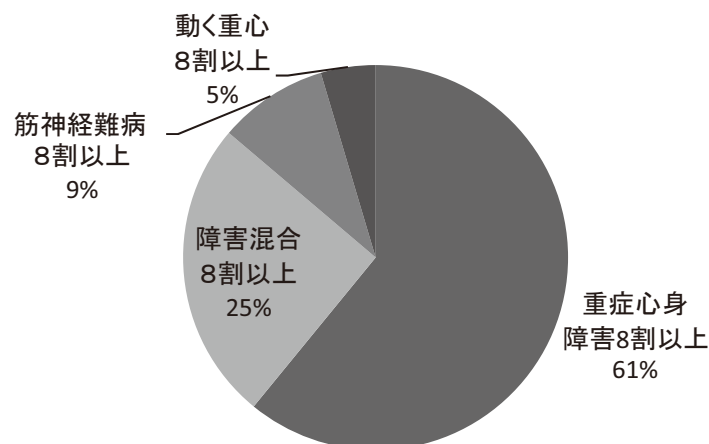


図3 利用者の障害の状態 (N=87)

表2 活動内容  
※網かけは、70%以上の事業所で取り組まれている活動を示している。

カテゴリー	具体的な選択項目と選択率							
日常的活動	散歩	91%	外気浴	83%	朝の会	52%	お昼の集い	16%
鑑賞活動	音楽鑑賞	77%	芸能鑑賞	49%	朗読絵本鑑賞	73%	映画鑑賞	56%
表現活動	楽器演奏	76%	歌唱	55%	寸劇	13%	朗読	34%
製作活動	絵画	75%	造形	63%	手工芸	51%	料理	30%
	園芸	47%						
運動・ 感覚・ リラクゼー ション活動	ムーブメント	50%	プール	44%	アロマ	73%	揺れ遊び	88%
	感触遊び	78%	スヌーズレン	82%	体操・ストレッチ・タッチング	69%	手遊び	60%
	足浴・手浴	70%	ダンス	47%	風船バレー	51%	ボーリング	67%
	ボッチャ	9%	車椅子サッカー	6%	手遊び	60%		
生涯学習・ 就労活動	生涯学習	23%	趣味的活動	61%	係活動	16%	リサイクル	6%
	就労活動	3%						
機能訓練・ セラピー	理学療法	86%	作業療法	88%	言語療法	63%	音楽療法	36%
	コミュニケーション機器活用	39%						
食事・美容	バイキング	27%	喫茶	28%	美容	41%		
季節行事 祝い行事 交流行事	雛まつり	73%	お花見	78%	イースター	3%	母の日	22%
	父の日	18%	七夕	82%	お盆	9%	花火	42%
	夏祭り	75%	ハロウィン	45%	秋祭り	40%	月見会	24%
	紅葉	10%	運動会	45%	クリスマス会	90%	正月	67%
	節分	63%	成人を祝う会	80%	誕生会	81%	長寿を祝う会	52%
	法人祭り	17%	地域交流	44%	招待・慰問	40%		
外出行事	集団バス外出	73%	個別外出	61%	旅行（宿泊）	13%		

本、芸能鑑賞、音楽鑑賞はいずれも7割以上の事業所で実施されていた。

表現活動の分類では、楽器演奏が76%、歌唱55%、寸劇13%、朗読34%、絵画75%、造形63%、手工芸51%、料理30%、園芸47%であり、楽器演奏や絵画は7割以上の事業所で実施されていた。

運動・感覚・リラクゼーションの分類では、揺れ遊び88%、感触遊び78%、アロマ73%、足手浴70%、スヌーズレン70%であり、いずれも7割以上の事業所で実施されていた。その他は、体操・タッチング69%、ボーリング67%、手遊び60%、風船バレー51%、ムーブメント50%、ダンス47%、プール44%であった。ボッチャやサッカーの実施率は1割以下である。

就労・趣味的活動では、趣味的活動が最も多く61%であった。生涯学習は23%、係活動16%であり、いずれも実施率は高くない。リサイクルと就労については、1割以下であった。就労を実施しているという事業所1件にその内容を問合わせたと、利用者が書いた絵画や詞をカレンダーとし販売している他、

筋・神経難病の利用者を中心とした自治会で、商品をデザインし、インターネット等を通じて販売しているとの回答を得た。

機能訓練では、作業療法8%、理学療法86%と9割近い事業所で取り組まれていた。また、言語療法は63%、音楽療法は36%、コミュニケーション機器の活用は39%の実施率であった。アニマルセラピーは1割程度の実施率であった。

食事・美容に関する活動として、美容は41%、喫茶は28%、バイキングは27%であった。自由記述には、食事に関する活動として、事業所内だけではなく、外食目的で外出するという回答もあった。

季節行事として、最も多く取り組まれていたのは、クリスマス会で90%であった。ついで七夕が82%、お花見78%、夏祭り75%、ひな祭り73%、正月行事67%、節分63%と多かった。交流的行事として、地域交流は44%、招待・慰問は40%との結果になった。自由記述によれば、交流は事業所内での交流活動だけではなく、療養介護の利用者が地域イベントに参加することや、地域の作品展示に出展するなどした間接的



な交流の取り組みなども行われている。祝いの行事では、誕生日会が81%、成人を祝う会が80%と高い割合を示している。自由記述として、成人を祝う会は、施設内では行わず、市主催の成人式に参加したという回答もあった。

外出行事として、最も多く取り組まれていたのはバスでの集団外出73%であり、ついで個別外出が61%であった。自由記述では、バスのような大人数の外出でも、個別外出でもない、小集団のグループ外出を実施しているとの回答も寄せられていた。また、自由回答の中には、外出先の具体的記述が多数あった。例えば、買い物、お花見、遠足、カラオケ、プール、コミュニティラジオ出演等である。宿泊を伴う外出としての旅行は13%と、実施率は低かった。

その他の活動として、帰省が難しい利用者に対して送迎移動支援や身体介護を行って自宅への日帰りでの帰省を支援しているという取り組みがあった(N=2)。また、家族参加型の行事やボランティアとの活動、院内売店での買い物といった活動も記述されていた。さらに特徴的な取り組みとして、同一法人内にある生活介護に療養介護の利用者が外出を兼ねて通所するといった事例もあった。

### 3. 2. 2 日中活動のねらい

日中活動のねらいは、「①特に重視しているもの2つを選択」、「②重視しているものを複数選択」という二つの方式で回答を求めた。その結果、「生活の豊かさや潤いをつくる」が最も重視されていた。また「楽

しみをつくる」、「日々の変化をつくる」、「生きがい・喜びをつくる」、「生活・体験の幅を広げる」、「利用者の希望を実現する」、「個性を生かす・尊重する」、「健康を保持・増進する」、「心理的安定を図る」なども、多くの事業所で重視していると回答された。一方で回答率が低かったものは、「生活年齢・性別に応じた暮らしをつくる」、「生涯発達を促す」、「共生社会の基盤をつくる」といったねらいであった(図4)。その他には、「安全」や「その人らしさを大切にする。強みを生かす、できること、得意なことに注目し、計画を立てる」、「リハビリ効果」という回答があった。

## 3. 3 事業所が考える活動の希望と課題

### 3. 3. 1 活動の希望

日中活動の希望に関する自由記述(n=67)の内容を整理した。その結果、「外出活動」にかかわる記述が最も多く51%の事業所で活動の充実・改善を求めている。その他、利用者の重度化・高齢化に対応した活動、個々のニーズに合わせた活動、小集団・集団で行う活動、ボランティア等外部の協力による活動の充実、時間に余裕のある活動3%、家族とのつながりを得る活動、などの記述があった。具体的記述は、表3の通りである。

### 3. 3. 2 活動の課題

活動を実施する上で課題があると回答したのは、68件77%であり、その困難要因(n=68)は、職員の人数がたりない68%、利用者の健康状態から活動への

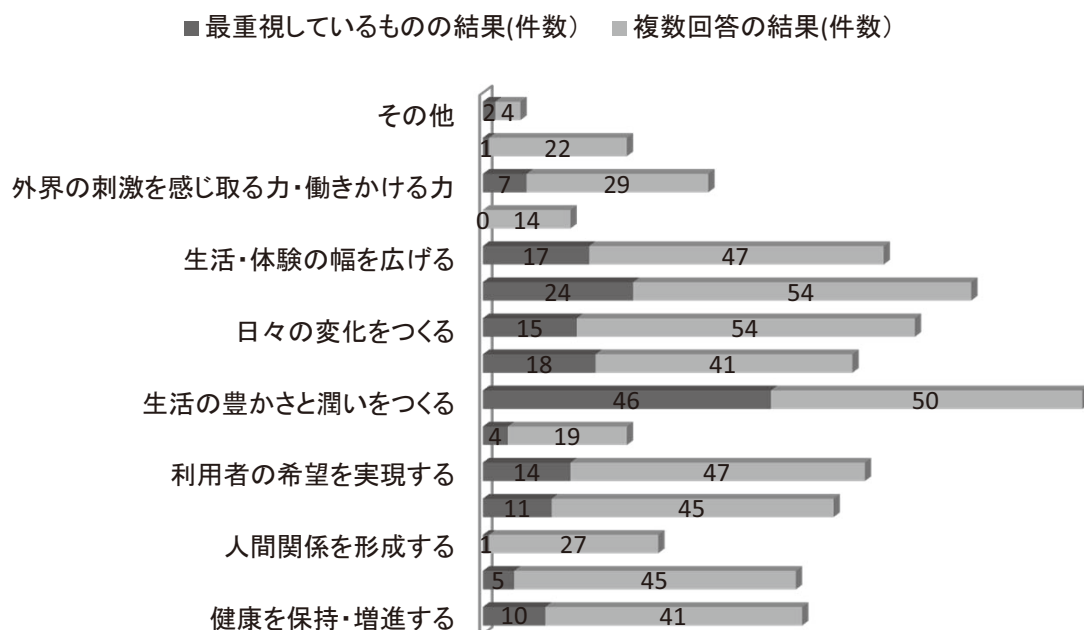


図4 活動のねらい (N=62)

表3 日中活動の希望に関する自由記述

活動	N	自由記述
外出・移動	34	昼食をかねた外出／遠足（家族・利用者全員で）／外出支援・活動（4）外出活動の更なる充実・回数を増やす（4）／呼吸器をつけら方等の外出に制限がある、気軽に出来ない・重症の方の外出が難しい（2）／遠方への外出（2）／常時呼吸器を使用している利用者の屋外療育などの外出／宿泊を伴う旅行（5）／散歩／外気浴等、障害が重くても気軽に外に出られるテラス的な環境が欲しい／買い物、ウィンドウショッピングなど気軽な外出（2）／個別外出（2）／今以上に外に出られる経験がしたい／バスドライブ・遠足のコースを増やす（雨天時でも行けるコース・施設が少ない）／利用者が多数参加している様な施設外活動（ピクニック、運動会等）／地域で開いているレク企画や習い事、教室に定期的にかよう／定期的な外出／外出行事について、もう少し遠出や時間をかけて行きたい／外出活動へ外出したい人はたくさんいるが回数が少なく満足できていない／同じ空間で長くすごす毎日なので、外の景色、空気、同じ年齢の人が楽しんでいる買い物、小旅行など／地域交流／公共交通機関の使用／自費による旅行や高額な入場料が必要な外出／戸外での活動／少人数による外出活動／外出支援は、入所者は最も楽しみにしている事ですが、年に1度しか行えない、人員不足と医療度が高くなっているため。専門知識をもっているスタッフがいない。何をどう行ったらいいかわからない。
障害の重症化・高齢化に対応した活動	7	気管切開、呼吸器を使用しているため、医療従事者が必要となるが、他患児へのケアがあり、工夫して何とかつきそうが十分な時間の確保がとれない。／医療の必要度が高い方の比率が高くなるにつれて、行事のバリエーションも限られ、活動も少なめの選択となってきた／吸器管理を必要とするなどより重い障害をもつ方への療育活動／花火大会、運動会（以前は行っていたが高齢化などの理由でやらなくなった経過があるが・・・）／呼吸器をつけら方等の外出に制限がある、気軽に出来ない／常時呼吸器を使用している利用者の屋外療育などの外出／超重症児への訪問療育
個々のニーズに合わせた活動・個別ニーズへの対応	6	個別活動（おひとりおひとりに合わせた活動）を確実に実施していきたい。人数が多く、月に1回実施することも困難／個性を活かし、ゆっくりのんびりと希望を取り入れられる活動／個々の要求にあった活動（遊び）の提供／個別支援計画にあげている内容をやってあげられる時間を増やして行きたい／理解力の高い利用者の趣味に合わせた活動がしたい／個別支援計画に基づく個々のニーズに合わせた活動の展開／個々のニーズ（希望）にあった活動
小集団・集団で行う活動の充実	5	現在、全体活動に併行して小集団での活動を展開している。個々の利用者が小集団として活動できるのは週1回となる。毎日全てのグループにスポットを当てた活動を展開したい／小集団グループ活動の充実／個別対応ではなく集団での活動を楽しめる人また自分で余暇を楽しめず行動上の問題を抱えてしまう人等を中心としたグループ活動、人との関わりをより楽しくできる活動／重症化、高齢化により個別的な活動が増えつつある中で集団で楽しめる活動も取り入れていきたい／全体での活動
ボランティア等との連携による活動	3	ボランティアの受け入れ～ボランティアによる活動。行事的なものではなく、日常的なもの／地域ボランティア受入による余暇の取り組み／音楽・芸術鑑賞をする外部からの協力、合同でのイベント
時間にゆとりのある活動	2	土日・祝日以外は、午前と午後4ページの表に分類された内容の活動をバランスよく実施するよう計画しており、今後も継続していくが、十分に時間が確保できないことがあり、そこが課題となっている。／気管切開、呼吸器を使用しているため、医療従事者が必要となるが、他患児へのケアがあり、工夫して何とかつきそうが十分な時間の確保がとれない。
家族とのつながりを得る活動	2	TV電話を利用した家族との面会や遠隔療育の取り組み。／遠足（家族・利用者全員で）
土日・祝日の活動	1	土日・祝日の活動の充実
活動専任配置	1	日中活動専任スタッフの充実による活動の頻度増
諸活動		スノーズレン（4）、アニマルセラピー（5）、映画・視聴覚室での映写（2）、花火大会（2）、お茶やコーヒーを楽しんだり飲んだりする活動（2）、喫茶1年を通して個人ごとに製作物をつくるなどの活動（1）、プール遊び（1）、感触遊び、スライム、小麦粘土など（1）、地域交流（1）、畑での園芸活動（1）、音楽療法（1）、金銭を得る就労活動（1）、パチンコやスロット等を取り入れた娯楽活動（1）、美容などの活動（1）、おやつづくり（1）、雪あそび（1）、プロを呼んでの芸能活動（1）

参加が難しい51%、医療スタッフの付き添いが難しい50%といった項目であった（図5）。「入所者の高齢化に伴い、体力を考慮し活動に制限があったり、計画通りに実施できなかったりすることが増えた。（自由記述）」との現状報告もあり、利用者の健康状態から様々な活動への参加が制限されていることが課題となっていた。また医療スタッフの付き添いに関しては、「重心なので医師の付き添いが必要。現在の行事につきそいはしてくれているが、これ以上は難しい。（自由記述）」といった人員確保に関する厳しい状況も伺えた。その他の困難要因としては、スタッフの力量の問題、利用者へのケアの必要性からまとまった時間の確保が難しいこと、外出に伴うバリアフリー環境が

十分でないこと、衛生や安全上の問題、ニーズ把握、院内でボランティアをコーディネートする存在の不在、などがあげられていた。

## 4. 考察

### 4. 1 日中活動の取り組みの実態

日中活動として実施率が8割を越えていた活動は、行事的活動を除き、散歩91%（日常的活動）、外気浴83%（日常的活動）、スノーズレン82%（感覚・リラク・運動）、揺れ遊び88%（感覚・リラク・運動）、作業療法88%（機能訓練・セラピー）、理学療法86%（機能訓練・セラピー）、また7割を越える活動は、朗

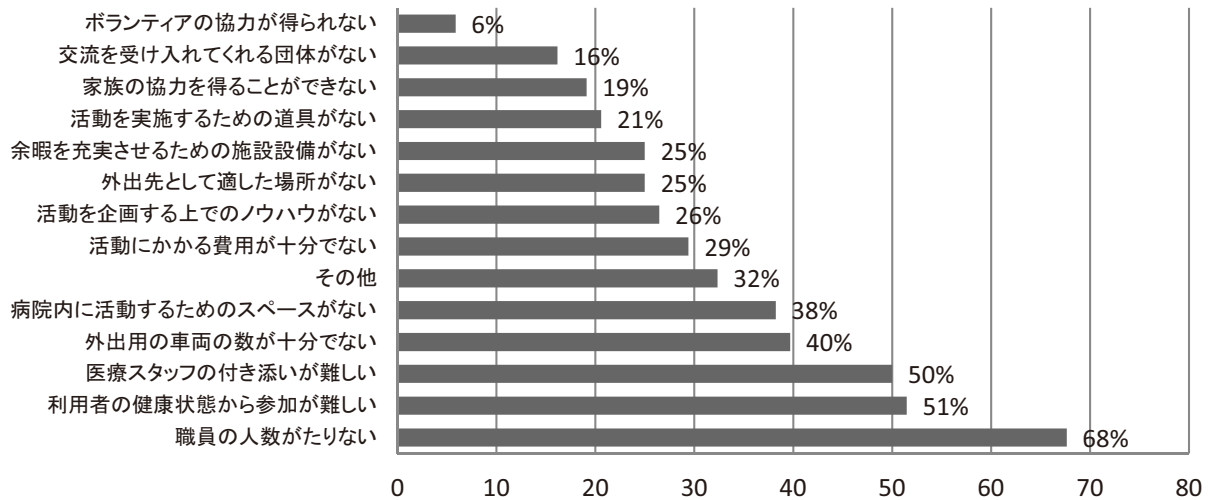


図5 活動実施の困難要因 (N=68)

読絵本鑑賞73% (鑑賞活動)、芸能鑑賞73% (鑑賞活動)、音楽鑑賞76% (鑑賞活動)、絵画75% (表現活動)、楽器演奏76% (表現活動)、足手浴70% (感覚・運動・リラク)、感触遊び78% (感覚・運動・リラク)、アロマ73% (感覚・運動・リラク)、バス外出73% (外出)であった。これらの活動は、障害の重い利用者にとって身体的な負担が少なく活動に参加しやすい、リハビリ要素がある、などの特徴がある。また、実施率が低かった活動は、寸劇13% (表現活動)、車椅子サッカー 6% (感覚・運動・リラク)、ボッチャ 9% (感覚・運動・リラク) など、自身が活動のルールや意味を理解し、主体的に取り組んでいく必要がある活動、就労3%、リサイクル6%、係活動16%といった「就労・奉仕的活動」であった。前者は、療養介護の利用者の実態として、重度の知的障害が運動障害に重複する重症心身障害が最も多いという結果、そして車椅子サッカーやボッチャについては、一定の広さのある活動スペースが必要であることも実施率の低い要因として推測できる。一方で、後者については、支援者による環境調整の方法次第で、実現の可能性を見出すことはできないだろうか。例えば、商品をデザインし、インターネット等を通じて販売しているとの回答があった。このように日々の活動を社会貢献につなげ、利用者の社会参加を促すための手立てについて、今後は具体的なノウハウを蓄積、共有していく必要があるだろう。

#### 4. 2 日中活動実施上の課題

##### 4. 2. 1 医療的な支援に関する課題

日中活動実施の困難要因として「利用者の健康状態から参加が難しい (51%)」「医療スタッフの付き添い

が難しい (50%)」が上位にあがっており、日中活動の充実に向けては、医療スタッフとの連携を基盤とした安全な活動の場を保障していく必要がある。また自由記述には、「医療的なケアが必要な方は、経管栄養のスケジュールなどの関わりも大切であり、日中活動というまとまった時間を確保することが難しい」との回答も寄せられていた。飯田 (2008) は、急に心身の緊張が高まったり、医療的ケアが必要になったりした場合は、日中活動を中断して適切に対処されることが最優先されるため、日中活動への支援は、生命・健康の維持、安全という緊急性に関する尺度からみた場合、低めに設定せざるを得ない場面もあることを指摘している。だが一方で、多くの医療者は、緊張が和らぐ姿勢の工夫、呼吸が楽になるような姿勢の管理に加えて「喜びや意欲を生み出す教育・療育」があつてこそ、医療的な改善や良い状態の維持が可能であることにも自覚的である (障害児 (者) の療育・医療に携わる医師有志の要望書.1997)。こうした議論は、療育等の日中活動と医療的な支援、両者のかかわりは切り離せない関係であり、双方の支援が車輪となつてはじめて利用者の「生」の豊かさが、浮かび上がることを示唆している。

障害者総合支援法では、療養介護での支援を「主として昼間において、病院において行われる機能訓練、療養上の管理、看護、医学的管理の下における介護及び日常生活上の世話をを行う。」としか明文化されておらず、日中活動についての具体的規定は「機能訓練や看護」の機会に留まっている。しかし、今回の調査を通じて実際には各事業所において、「機能訓練や看護」に限定されない、「創造的活動」あるいは「交流的活動」といった多様な活動に取り組んでいる実情が明ら



かになった。当事者の視点から日中活動の意義を再確認し、療養介護事業所における日中活動を医療や看護、介護、機能訓練と並ぶ事業所の役割として積極的に位置づけていくための条件整備が必要である。

#### 4. 2. 2 活動の企画・運営に関する課題

本調査において、活動部署及び専任の配置は69%であったが、活動部署の設置や専任の指名を推進することで、効率的な活動の企画・運営が可能になると考える。先行研究においても、日中活動支援担当者を指名することで、計画的で継続的な活動の運営が可能になることが報告されている（例えば、山田 2014, 大場 2011, 及川 2009）。また活動の困難要因に関する自由記述では、「ボランティアをコーディネートする人材の不在」もあげられていたが、活動専任が、こうした外部機関との連携窓口も担うことで、活動内容や活動にかかわる支援者も広げていくことが期待できる。これまで専任を置くことによる効果や課題の検証は十分に行われてきていない。今後はこうした検証を進める同時に、日中活動を担う担当職員に求められる資質や人材養成の在り方についても検討していく必要があるだろう。

#### 4. 2. 3 外出活動に関する課題

本調査の中で事業所が考える活動の希望として最も多い内容は「外出支援の充実」であった。しかし、自由記述では、「呼吸器をつけられた方等の外出に制限がある、気軽に出不来ない、重症の方の外出が難しい」との回答があるように、医療的な支援が常時必要な人にとっての外出は様々なリスクを伴うことが課題となっている。外出を実現していくためには、医療ケア等の対応ができる支援者の確保、移動手段、バリアフリー環境の整った外出場所など様々な要件があり、外出に伴う体制整備を進めていく必要性が示唆された。

加えて、外出や帰省を行う際に、移動支援といった地域系サービスや、自宅で身体介護を受けるといった在宅系サービスを福祉サービスとして申請できない、という現行制度の制約も外出活動を実現させる困難要因となっているだろう。平成27年12月14日に厚生労働省社会保障審議会障害者部会が提出した報告書「障害者総合支援法3年後の見直し」では、医療機関に入院中の外出・外泊に伴う移動支援について、「十分な対応がなされていない現状にある」という指摘がはじめてなされている。また同報告では、施設に入所中の外出・外泊に伴う移動支援については、施設サービス

の「日常生活上の支援」の一環として行われており、現行の障害福祉サービス等報酬において評価されているが、相応の人手や労力を要することから施設ごとに対応が異なっているとも言及された。今後は、医療機関に入院中の外出・外泊に伴う移動支援や在宅支援についても、障害福祉サービス（同行援護、行動援護、重度訪問介護）が利用できるような体制整備を進めていく必要がある。

#### 4. 2. 4 ニーズ把握に関する課題

調査結果から、療養介護の利用者は、重症心身障害、動く重心、筋・神経性難病を中心とし、様々な実態の利用者が生活していることが分かった。事業所が考える活動の希望としても、「理解力の高い利用者の趣味に合わせた活動がしたい。」などの自由回答があり、とりわけ意図理解が困難な利用者と、理解力が高い利用者（例えば、重度の知的障害を伴う重症心身障害者と知的な遅れがない難病患者）との間には、具体的な活動の希望に乖離があることが伺える。また「利用者の希望に合わせた活動を行うこと」が活動のねらいとして重視されているという現状を踏まえれば、実践場面において、利用者の希望をどのように捉え、具体的な活動につなげていくかが焦点となるだろう。先行研究においては、利用者による話し合いにより活動内容を決めた事例もあるが（藤原 2007）、実際には、重度の障害者の多くは、自身の希望について考えるという行為そのものや、思考を言語表出につなげる手段を獲得できていない方が多いことも現実である。こうした意思の読み取りが難しい当事者の思いをどう捉え、ニーズを活動につなげていくかという問題について、事例的考察を深めていく必要がある。

#### 付記

本論文の内容の一部は、第22回日本特別ニーズ教育学会研究大会にて発表した。

#### 引用文献

- 藤原達也・他 (2007): 「活動ミーティングをやりたいことを自分たちで決めようー」、重症心身障害の療育, 3 (1), 107
- 飯田茂 (2012): 「重症心身障害児 (者) 通園施設での寸劇的手法による日中活動支援と青年の変化」, 福祉研究, 104 巻, p29-36
- 北住映二 (2010): 各論「小児期から成人期への臨床経過とそ



- の経年的なマネジメント」, 神経疾患脳性麻痺, 日本臨牀, 68 (1), 27-32
- 小谷祐実・三木裕和 (2001): 「重症児・思春期からの医療と教育」, クリエイツかもがわ
- 厚生労働省・社会保障審議会障害部会 (2015): 報告書「障害者総合支援法施行3年後の見直しについて(案)」, (2015年12月14日付)
- 森優子 (2005): 重度の障害を抱えた子どもたちの思春期, 小児科診療, 6, 109-114
- 及川多恵子・他 (2009): 「日中活動支援専任スタッフと病棟スタッフの協働による日中活動の取り組み」, 重症心身障害の療育, 5 (1), 141
- 大場誠一郎・他 (2011): 「日中活動の見直しにおける効果と課題」, 重症心身障害の療育, 6 (1), 108
- 澁谷博 (2007): 「これからの療育指導室の役割(特集 曲がり角に立つ重症心身障害医療)」, 医療 61 (11), 737-742
- 杉原彩乃 (2016): 「重度障害者の日中活動の実態に関する研究Ⅰ—先行研究からみた活動の内容とねらいの分類—」, 第51回日本発達障害学会発表要旨集 p139
- 杉原彩乃・加瀬進 (2014): 「重い障害のある青年・成人の学習・社会参加に関する研究の動向と課題」, 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ, 第66集, 9-15
- 障害児(者)の療育・医療に携わる関東地区医師有志 (1997), 「厚生労働大臣への医療的ケアに関する要望書」, (平成9年11月付)
- 山田久美子・他 (2013): 「活動専任職員配置後の3年間の活動実践」, 重症心身障害の療育, 9 (1), 88

## 療養介護事業における日中活動に関する調査

お忙しい中、本調査にご協力いただき、誠にありがとうございます。  
この調査は、療養介護事業における日中活動支援を検討する上での基礎資料を得ることを目的としています。回答結果は、個人の回答が取り上げられず、他に知られたりすることはありません。また、施設名や特定の職員の方に関する情報は一切公開致しません。プライバシーは厳守致します。  
それでは、以下の「記入にあたってのお願い」をご一読の上、質問項目にご回答をお願い致します。

## 《記入にあたってのお願い》

- この回答は、日中活動の企画・運営に関わっている職種の方に回答をお願いしています。
- 本調査における日中活動は、以下のように定義しています。  
**療養介護事業所に入所する利用者の社会参加や余暇の充実を促すため、支援計画に意図的に設定された活動を指す。したがって、本人の状況を見て、職員が個別に声をかけるなど、その場での臨機応変な対応は含まない。**
- お答えは、あてはまる回答についている数字（1、2、3…）を○印で囲んでいただく場合と記入欄に書き込んでいただく場合があります。
- で囲んでいただく場合は、「すべて」等としている場合を除き、1つだけ選んでください。
- 「その他」を回答された場合は、その具体的な内容についてもお答えください。

問1 回答される方についてご記入ください。

職種名 \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_  
療養介護での支援歴 \_\_\_\_\_  
※ 制度移行前の施設での支援歴も含めて回答ください。

問2 貴事業所の障害者自立支援法以前の施設種別に○をつけてください。

1 重症心身障害児施設	2 肢体不自由児施設	3 筋ジスト・神経難病
4 新規開所	5 その他（具体的に _____）	

問3 病院内に併設の障害児（者）福祉サービスがあれば、すべてに○をつけてください。

1 生活介護	2 児童発達支援	3 医療型障害児発達支援
4 医療型障害児入所施設	5 放課後サービス	6 短期入所
7 相談支援	8 その他（具体的に _____）	

問4 貴療養介護事業所の病床数についてご記入ください。

定員 \_\_\_\_\_ 床  
現在利用 \_\_\_\_\_ 名

問5 病院の職員についてご記入ください。

- （1）貴事業所にかかわる職員の人数をご記入ください。  
※ 常勤・非常勤合わせて数でお答えください。

職種	人数
サービス管理責任者	名 _____
医師	名 _____
看護職員	名 _____
生活支援員	名 _____
理学療法士	名 _____
作業療法士	名 _____
言語聴覚士	名 _____
管理栄養士	名 _____
薬剤師	名 _____
医療相談員	名 _____

- （2）貴事業所の日中活動の企画・運営にかかわる「療育指導室」、あるいは日中活動専任スタッフがいれば、職員の人数をご記入ください。（日中活動専任スタッフは、職種名もご記入ください。）  
※ 常勤・非常勤合わせて数でお答えください。

療育指導室		日中活動専任	
職種	人数	職種	人数
療育指導室長	名 _____		名 _____
児童指導員	名 _____		名 _____
保育士	名 _____		名 _____

- （3）その他の職員配置があればご記入ください。

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

問6 貴事業所の利用者についてお聞きします。

- （1）利用者の主たる状態像とその割合について、A～D それぞれに最もあてはまる数字の○をつけてください。またその他の状態像がある場合は、Eの【 \_\_\_\_\_ 】欄にご記入ください。

状態像	割合（数字に○をつけてください）			
A 神経・筋難病	1 3割以下	2 5割程度	3 5割以下	4 8割以上
	3 5割～8割	4 8割以上		
B 重症心身障害	1 3割以下	2 5割程度	3 5割～8割	4 8割以上
	3 5割～8割	4 8割以上		
C 軽く重症者	1 3割以下	2 5割程度	3 5割～8割	4 8割以上
	3 5割～8割	4 8割以上		
D A～Cに該当しないが、常時医療的なケアが必要な方	1 3割以下	2 5割程度	3 5割～8割	4 8割以上
	3 5割～8割	4 8割以上		
E その他：具体的に _____	1 3割以下	2 5割程度	3 5割～8割	4 8割以上
	3 5割～8割	4 8割以上		

【本調査項目における状態像について】

## A 神経・筋難病

筋ジストロフィー、筋萎縮性側索硬化症（ALS）、パーキンソン病、脊髄小脳変性症などの神経筋難病の方。

## B 重症心身障害

重度の肢体不自由と重度の知的障害が重複した状態にある方。

## C 軽く重症者

歩行可能で重度知的障害がある方。  
（知的障害とともに難治性てんかん等の合併症によって常に医療的ケアが必要な方、強度の行動障害のために濃厚な介護・環境調整が必要な方。）

- （2）最も多い利用者の年齢層は下記のうちどれですか。当てはまる数字に○をつけてください。

1 18歳～30歳	2 31歳～40歳
3 41歳～50歳	4 51歳以上

問7 貴事業所で行われている日中活動についてお聞きします。

日中活動として取り組んでいる活動すべてを選び、□にチェックを入れてください。

注意 ●内容を重複する活動は両方を選択ください。

例）イラストをパソコンで書いている → □絵画 □パソコン

活動分類	活動内容
A 日常的活動	□散歩 □外気浴 □朝の会 □お昼の集い
B 鑑賞活動	□音楽鑑賞（コンサート等） □芸能鑑賞（パフォーマンス・劇等） □絵画・絵本・パネルシアター鑑賞 □映画鑑賞
C 表現活動	□楽器演奏 □歌唱 □寸劇 □朗読
D 製作活動	□絵画 □造形 □手工芸 □料理 □園芸
E 感覚・運動・リラクゼーション	□ムーブメント □フール（水中運動療法） □アロマ □おしゃべり（シートブランコ、エアートランポリン、バルーン 等） □感覚遊び（ボールプール、感覚体験 等） □スヌーズレン □体操・ストレッチ・タッチング □手遊び □足浴・手浴 □ダンス（リズム・車椅子ダンス等） □風船バレー □ボーリング □ボッチャ □車椅子サッカー
F 生涯学習・趣味・就労・奉仕活動	□生涯学習（英会話、書道、詞・作文作成 等） □趣味的活動（写真、パズル、ゲーム 等） □係活動 □リサイクル □就労的活動（金銭を得る）
G 機能訓練セラピー	□理学療法 □作業療法 □アニマルセラピー □言語療法 □音楽療法 □コミュニケーション機器活用
H 食事・美容	□バイキング □喫茶 □美容（メイク・おしゃべり等）
I 季節行事・祝いの行事・交流行事	□ひな祭り □お花見 □イースター □母の日 □父の日 □七夕 □お餅 □花火 □夏まつり □ハロウィン □秋まつり □月見会 □紅葉 □運動会 □クリスマス会 □正月（新年会、もちつき、書き初めなど） □節分 □成人を祝う会 □誕生日会 □長寿を祝う会 □法人祭り □地域交流 □招待・慰問
J 外出行事	□集団バス外出 □個別外出 □旅行（宿泊を伴う）
K その他	上記以外で実施している活動があれば、こちらにご記入ください。

問8 貴事業所の日中活動支援形態別の活動内容・活動頻度についてお聞きます。

(1)～(3)の形態で行っている活動の内容と頻度として最も当てはまるアルファベット及び数字に○をつけてください。活動内容は複数回答していただいて構いません。活動内容の例は前ページをご参照ください。

(1) 1対1支援で実施している活動

● 活動内容 (該当する活動すべてに○をつけてください)

A	日常活動	B	鑑賞活動	C	表現活動
D	製作活動	E	運動・感覚・リラク	F	生涯学習・就労
G	機能訓練・セラピー	H	食事・美容	I	行事 (季節・祝・交流)
J	行事 (外出)				

● 活動頻度

1	実施していない	2	1年間に数回程度	3	1ヶ月に1回程度
4	1ヶ月に数回程度	5	1週間に1回程度	6	1週間に数回程度
7	1週間に5日以上	8	その他 (具体的に )		

(2) 小集団グループで実施している活動

● 活動内容 (該当する活動すべてに○をつけてください)

A	日常活動	B	鑑賞活動	C	表現活動
D	製作活動	E	運動・感覚・リラク	F	生涯学習・就労
G	機能訓練・セラピー	H	食事・美容	I	行事 (季節・祝・交流)
J	行事 (外出)				

● 活動頻度

1	実施していない	2	1年間に数回程度	3	1ヶ月に1回程度
4	1ヶ月に数回程度	5	1週間に1回程度	6	1週間に数回程度
7	1週間に5日以上	8	その他 (具体的に )		

(3) 利用者全体を対象に実施している活動

● 活動内容 (該当する活動すべてに○をつけてください)

A	日常活動	B	鑑賞活動	C	表現活動
D	製作活動	E	運動・感覚・リラク	F	生涯学習・就労
G	機能訓練・セラピー	H	食事・美容	I	行事 (季節・祝・交流)
J	行事 (外出)				

● 活動頻度

1	実施していない	2	1年間に数回程度	3	1ヶ月に1回程度
4	1ヶ月に数回程度	5	1週間に1回程度	6	1週間に数回程度
7	1週間に5日以上	8	その他 (具体的に )		

問9 貴事業所が日中活動で取り組んでいきたい活動と、その実施が難しい理由についてお答えください。

(1) は記入をし、(2) は数字を○で囲んでください。

(1) 現在は実施することが難しいが、今後取り組んでいきたい活動

(2) (1) であげた活動を実施することが難しい理由として当てはまるものを以下からすべて選び、○をつけてください

- 1 ボランティアの協力が得られないため
- 2 職員の人数が足りないため
- 3 医療スタッフの付き添いが難しいため
- 4 家族の協力を得ることができないため
- 5 病院内に活動するためのスペースがないため
- 6 病院内に余暇を充実させるための施設設備がないため (図書館、カフェなど)
- 7 活動を実施するために必要な道具がないため (パソコン、意思伝達装置など)
- 8 外出用の車両の数が十分でないため
- 9 活動にかかる費用が十分でないため
- 10 病院から利用可能な範囲に外出先として適した施設がないため (商業施設、遊興施設など)
- 11 地域に交流を受け入れてくれる団体がないため
- 12 利用者の健康状態から活動に参加することが難しいため
- 13 活動を企画する上でのノウハウがわからないため
- 14 その他 : 具体的な理由をご記入ください

問10 日中活動内容を計画・決定する上で重視していることは何ですか。該当する数字すべて選んで○をつけてください。

また、特に重視していること2つの数字を口の中にご記入ください。

1 健康を保持・増進する	2 心理的安定を図る
3 人間関係を形成する	4 個性を生かす・尊重する
5 利用者の希望を実現する	6 生涯発達を促す
7 生活の豊かさと潤いをつくる	8 生きがい・生きる喜びをつくる
9 日々に変化をつくる	10 楽しみをつくる
11 生活・体験の幅を広げる	12 共生社会の基盤をつくる
13 外界の刺激を感じ取る力・働きかける力を高める	14 生活年齢・性別に応じた暮らしをつくる
15 その他 (具体的に : )	

□ □

### 電話・訪問調査のお願い

調査者は、引き続き、療養介護事業所の日中活動の実態について明らかにしていきたいと考えています。今後、貴事業所について継続調査にご協力いただける場合には、調査協力可能な方法を選択し、連絡先をお教えください。後日、日程調整の連絡をメールにて送らせていただきます。

▼ 該当する数字に○をつけてください。

- 1 電話調査への協力が可能です。
- 2 訪問調査への協力が可能です。

▼ 連絡先をご記入ください。

病棟・病棟名 \_\_\_\_\_  
お名前 \_\_\_\_\_  
電話 \_\_\_\_\_  
メールアドレス \_\_\_\_\_

★ 調査は以上です。お忙しいところ、ご協力頂きありがとうございました。  
返信用封筒に入れ、そのまま投函ください。

# 重度障害者の日中活動の実態に関する研究Ⅱ

——療養介護事業所へのアンケート調査を手がかりに——

## Study II on the Actual Condition during the Day Activities of Severe Disabled Persons:

Through a Questionnaire Survey in the “Ryoyokaigo” (Medical Care) Business

杉原 彩乃<sup>\*1</sup>・加瀬 進<sup>\*2</sup>

Ayano SUGIHARA and Susumu KASE

特別ニーズ教育分野

### Abstract

We conducted a questionnaire survey of the day activities of severe disabled persons in all “Ryoyokaigo” (medical care) business in Japan. The number of “Ryoyokaigo” business was 209, and the recovery rate was 41.3%. The term “Ryoyokaigo(medical care)” as used in “Services and Supports for Persons with Disabilities Act” means to provide persons with disabilities who need medical care and who are ones prescribed as the persons who need nursing care continuously in Ordinance of the Ministry of Health, Labour and Welfare with functional training, care management, nursing care, care under medical management, and daily care which are conducted in hospitals and the other facilities prescribed in Ordinance of the Ministry of Health, Labour and Welfare mainly in the daytime. However, in order to improve QOL, not only such a medical care in each hospitals or facilities, but also various day activities – e.g.)outside air bath ,appreciation activities, expressive activities .etc- have been carried out. On the other hand, from the shortage of staff and medical staff, decrease of physical strength with age, the lack of social resources and so on, it became clear that the difficulty occurs in the deployment of day activities in accordance with the needs of each person . In the future, we’ll try to clarify more the needs of severe disabled persons in the “ Ryoyokaigo (medical care ) “.

**Keywords:** severe disabled persons, ryoyokaigo(medical care), day activities, needs

*Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 本研究では、我が国における全ての療養介護事業所を対象に重度障害者の日中活動の実態について悉皆調査を行った。対象事業所数は209カ所、回収率は41.3%である。

障害者自立支援法で規定された「療養介護」とは、「医療を要する障害者であって常時介護を要するものとして厚生労働省令で定めるものにつき、主として昼間において、病院その他の厚生労働省令で定める施設において行われる機能訓練、療養上の管理、看護、医学的管理の下における介護及び日常生活上の世話の供与」と定められている。しかしながら、「生活の豊かさや潤いをつくる」ために、事業所内における医療的ケアにと

---

<sup>\*1</sup> Nagano Special Needs Education School (Nishiminowa 8274, Ina-shi, Nagano, 399-4577, Japan)

<sup>\*2</sup> Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)



どまらず、散歩・外気浴や鑑賞活動、表現活動など様々な取り組みがなされていた。一方、職員や医療スタッフの不足、当事者の高齢化に伴う体力の低下、社会資源の不足などから、一人一人のニーズに応じた日中活動の展開に困難が生じていることが示唆された。従って、今後は療養介護を利用している重度障害者のニーズをいっそう明らかにする必要がある。

キーワード: 重度障害者, 療養介護, 日中活動, ニーズ